東京下町における観光資源の分布に関する調査研究

D1-10012 天貝　悠

1.　序

1．1　背景と目的

江戸時代には、観光地を巡るために有名な観光地を紹介する刊行物が次々と発行された。現在の東京の観光資源を紹介する刊行物は多様に種類を増やし、発行されている。中でも、リーフレットなど紙媒体による観光マップは区役所や駅､観光案内所､店頭等で配布されており、人々が目にする機会も多い。観光まちづくりの場では初期段階に、観光資源を市民と行政が理解するためにつくられることもある。

観光マップの制作過程では、観光物となりうる地域資源を探し、地図上にプロットしていく。それを分析することで、地元地域の人々が選び出す都市の観光資源がどのように分布しているのかがわかるのではないかと考えた。

本研究では、観光マップを資料に観光資源の分布を調査・分析し、東京下町の観光資源がどのような要因から分布しているのかを明らかにし、東京の街づくりの知見を得ることを目的とする。

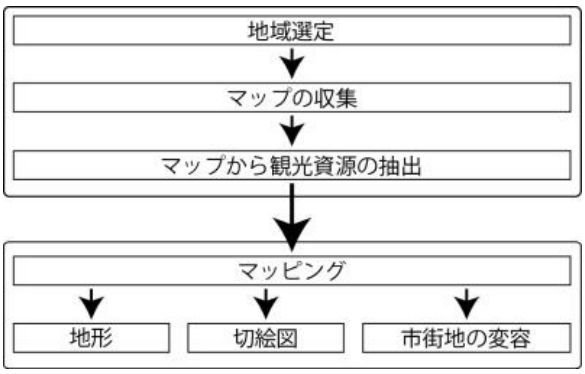

図 1　研究のフロー

図 2　観光マップの例

1．2　研究方法

研究のフローを(図 1)に示す。観光マップは東京都 23 区の区役所と観光協会が配布していることを条件に収集した。その結果、255 枚の観光マップが収集できた。その中でも比較的枚数の多かった墨田区と台東区に加えて江戸の下町として栄えた中央区と江東区を今回の研究対象とすることにした。収集した地図に記載されている情報のうち地図上でナンバリングされ、地図街で詳しい説明が書いてある資源のみを観光資源として抽出した。抽出した資源は宗教施設（神社、寺)、公共施設（公民館、博物館)、商業施設（商店、興行を目的とした施設)、史跡（石碑、看板、秘仏)、自然（木、公園)、土木（橋)、景観の７つに分類した。

表 1　研究に用いた下町のマップ数

墨田区	台東区	中央区	江東区
21 枚	22 枚	12 枚	6 枚

2．下町と観光について

2．1　東京観光の変容

江戸時代には寺社・景勝地を中心に観光が栄えた。幕末の混乱期に観光業は衰退するが、明治・大正期になると銀座や日本橋に近代的な西洋の建物群や町並みができ人気を呼んだ。戦後には、建設技術の向上による大型の行楽施設の建設、臨海副都心の開発が行われ、臨海部に新しい観光スポットが出来るようになる。現代、インフラの老朽化に伴う駅前の再開発が行われ、新しい観光スポットが都心に誕生している。下町には東京スカイツリーができ､新しい観光スポットとして注目を集めている。また、民間では観光まちづくりの動きが各所でおこっている。

2．2　東京の市街地の変容

明治・大正期に新政府による銀座煉瓦街などの都市開発が行われた。関東大震災の震災復興計画による街区整備事業によって、下町の街路の多くが現在の形に整備された。また、墨田などに防災公園の設置が行われるなどした。第二次世界大戦時には、防空のための疎開事業が行われ、多くの防災空地が設けられた。戦後、広域の戦災復興計画が計画されたものの、行われず、瓦礫処理のための下町の水路埋め立てや闇市の処理など諸処で戦後の混乱を収拾する運動が行われた。その後、容積地区制

の導入により都市が高層化する時代となる。首都高速の開通や湾岸の埋め立てが行われ、下町の様相も変わって行った。

3. 観光資源の分布動向

1章で対象のマップを選定し、それらから抽出した観光資源を地図上にマッピングした。まずマッピングした地図から観光資源の分布傾向を読み取り、「地形」「江戸切絵図」「市街地の変容」から観光資源がどのような動向にあったのかを分析する。

3. 1　観光資源の分布をマッピングから見る

《墨田区》隅田川沿いに観光資源が多く偏っていて、東側の地域にはほとんど分布していなかった。特に両国・吾妻橋に観光資源が集中している。逆に本所や錦糸町方面には観光資源の空白地域があった。観光資源のごとにみると、隅田川に架かる橋のほとんどが観光資源となっており、両国周辺には史跡が多いことが特徴的だった。《台東区》広域に観光資源が分布しており、上野・浅草に特に集中していた。新御徒駅周辺や吉原周辺には観光資源が分布していない空白地域であることが分かる。また、西浅草などは社寺が分布しているものの一カ所に集中せず、分散して存在していた。上野広小路には商業が多く集中していた。《中央区》内陸側に観光資源が多く集まっている。逆に、埋立地には観光資源が少ない事がわかる。内陸側の資源の集積地には主に商業施設が集まっており、日本橋付近は施設が大規模で、銀座付近は小規模である。《江東区》亀戸には寺社が集まっており、東部と北部の間に観光資源の空白地帯がある。その空白地域に近い住吉～西大島駅付近には史跡が多く目立った。また墨田区同様、隅田川沿いに観光資源が分布しており、運河が多いことからそれらとの関係性も考えられる。

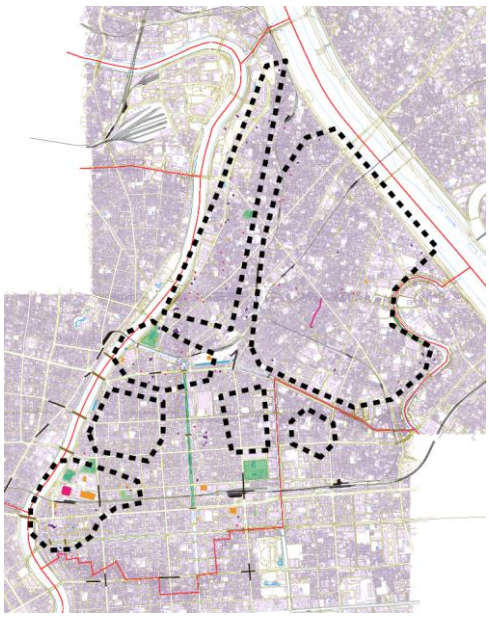

図 3　墨田区分布傾向図

図 4　台東区分布傾向図

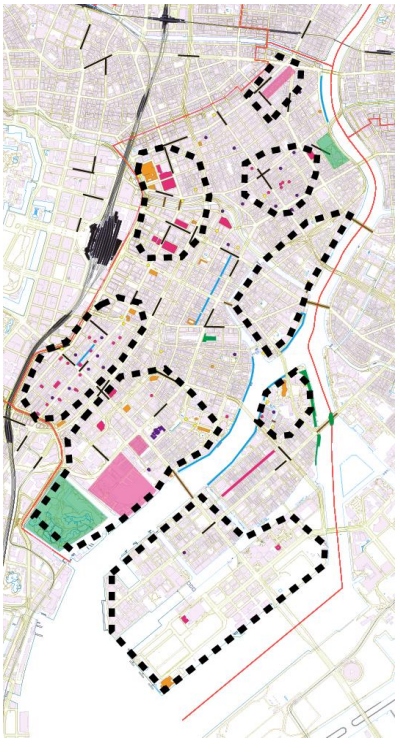

図 5　中央区分布傾向図

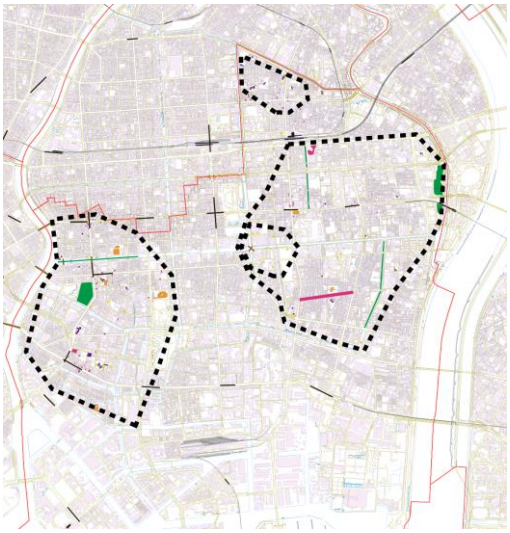

図 6　江東区分布傾向図

3．2　観光資源の分布と地理的要因

《墨田区》墨田区は多くが低地であり、隅田川沿いは標高が高くなっている。最も標高の高い白髭公園の周辺には観光資源があまりない。観光資源はやや標高の高くなっている川沿いにまとまっていることが分かった。観光資源の多い吾妻橋や両国もこの微妙な高地に位置しているがほかのエリアとの突出した特徴は見られなかった。また低地の広がっている東側は観光資源が少ないエリアに当たり、広範囲に分散している状態が見られた。《台東区》台東区は台地と低地に分かれている。低地の中でも浅草寺などは微妙な地形の起伏の上に立っており、観光資源が周囲に集中していることがわかる。また観光資源が寺社のみが集まっている西浅草エリアは地形的な特徴が乏しいことがわかる。資源の少ない空白地域にも地形の特徴は乏しく平坦である。《中央区》商業施設の集まる銀座、日本橋、京橋は中央区の中でも高い位置に置かれている。佃島は海抜が低いが観光資源が集中しており、標高の高くなる湾岸付近は観光資源が非常に少なく多くは空白地域である。《江東区》湾岸は標高が高くなっており、内陸になるにつれ標高が低くなっていく。今回プロットできた観光資源はこの低地にのみ分布しており、墨田区と同様、地形的特徴のない地域であり、観光資源が拠り所なく分散していることが見て取れる。

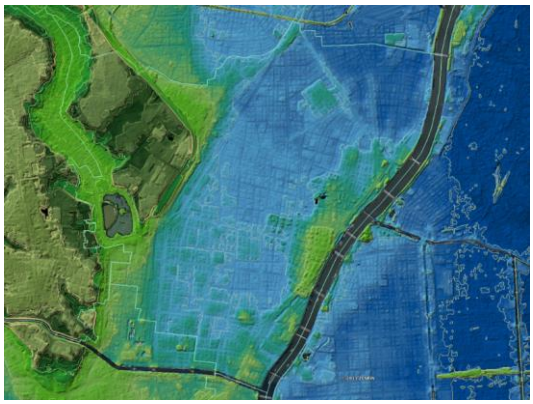

図７　台東区地形図(Google Earth)

3．3　観光資源の分布と歴史的要因

比較分析には江戸切絵図を用いた。《墨田区》墨田区の切絵図は本所と向島を中心とした２枚があった。現在、観光資源の空白地域となっている本所エリアは、多くが武家地であったことが見て取れ、観光資源が一か所に集中している吾妻橋、両国には寺社と町人町の集積が見られる。墨田区からは外れるが、切絵図には亀戸の寺社群も載せられており、一帯が観光エリアとして成長していったことがうかがえる。現在、観光資源としてプロットされている隅田川を渡る橋群だが、切絵図が作成された1850 年代にはまだ両国橋と吾妻橋があるばかりである。橋の両岸が交通の要所となり、多くの人で賑わったことから観光地が形成されたと考えられる。隅田川沿いに観光資源が偏っており、向島の隅田川沿いには桜並木が書き込まれている。川と桜といった景勝地であったことから向島に観光地帯が形成されたと考えられる。隅田川の東側のエリアはほとんどが水田として利用されており観光地が発展しなかったと考えられる。《台東区》浅草寺の周辺には町人町が発達しており、現在の賑わいもかつてからあったものということが伺える。台東区には今戸、西浅草などに寺社地が存在しており、現在は観光資源になっているが、寺社が密集していたため町人町などは発展せず、現在のような、まとまってはいるが、局所的な集中を見せない体系になったと考えられる。観光資源の空白地域である新御徒町駅周辺は武家地であった。また、吉原周辺には野原が広がっており、吉原が遊郭であり、現在にいたるまで歓楽街であるという地域性のため、観光資源が発展しなかったものと考えられる。墨田区では隅田川沿いに観光資源が発展したが、台東区南部には幕府による大きな蔵があったため、観光資源が発達しなかったと考えられる。上野広小路辺りには寛永寺の参道沿いに町人町がつくられており、門前町として栄えていたことがうかがえ、現在でもそのエリアには多くの商業が集まっている。《中央区》現在とほぼ同じ町割りが広がっている。大きく違うのが中央区を巡っていた水路が現在ではほとんど見られないということである。地形図に連続して陥没した地形を見ることができるが、それらは当時の水路の名残である。かつての水路の後を見てみると、水路跡沿いに史跡が多いことがわかる。日本橋、京橋、銀座といった商業が発展しているエリアには町人町がひろがっていた。そしてその周りに武家地が存在したが、武家地が現在の観光資源の空白地域となるのはほかの区と同じ傾向である。しかし武家地だけというわけではなく町人町も多く含まれており、武家地の大きな敷地を活用した大型の施設などが作られている。築地市場はその一例であり、もとは武家地である商業が集まっている馬喰町、人形町は武家地や町人町が発達したエリアであり、橋が隣接していたことから交通の要所としてにぎわったのではないかと考えられる。湾岸は切絵図にみられるのは佃島のみであり、現在みられる島の大部分は埋め立て地だということがわかる。島内には狭いながら町人町が作られており、観光資源が発展したものと考えられる。《江東区》江東区は現在の東部、深川地区を対象とした切絵図しかなく、明治通り以西の範囲しか見ることができない。亀戸には社寺が集まっているが、江東区内よりも墨田区の社寺との関連性が強いと考えられる。西大島駅と住吉駅との間に史跡が集まっているエリアがあるが田んぼが多く、史跡のもととなるものが集積しているようには考えられない。切絵図の時代以降、次第に発展していく中で史跡ができたものと考えられる。深川には江戸由来の社寺があるようであるが、それらが発展した理

由として水路が挙げられる。分散しているように見えた観光資源同士も水路を通してつながっていたものと考えられる。現在でも水路が多く、観光資源の一つとなっている。それに伴い川沿いに観光資源が分布している傾向にあるようである。

図 8　江戸切絵図・銀座日本橋

3．4　観光資源の分布と市街地の変容

市街地の変容を読むにあたって、銀座煉瓦街、関東大震災の震災図、震災復興の実施図、空襲延焼範囲図、江東墨田防災開発図、湾岸埋立地図の図と東京の都市計画史（越沢明）と東京の都市計画百年（東京都）を参考にした。

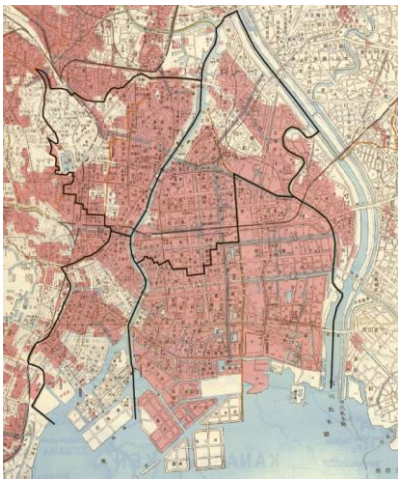

図 9　戦災延焼図

《墨田区》震災の復興計画によって西側のエリアの町並みが整備された。整備された地域には史跡が多いことがみられる。橋が観光資源として多く取り上げられているのは災害を機に作られた復興インフラであり、当時の歴史を色濃く反映したものであるためと考えられる。江戸切絵図では桜の名所として描かれていた隅田川堤だが、首都高が建設されると、それによってプロムナードが分断されてしまい、桜が観光資源として取りあげられなくなってしまったと考えられる。《台東区》戦前、建物の疎開が行われていたエリア(言門通り沿い)では闇市が発達していた。それらは政府によって撤収され、現在では観光資源が少なくわずかに商業と工業施設があるばかりである。《中央区》銀座煉瓦街といった開発が明治期に行われ銀座日本橋が商業の中心地として発展した。戦災で生まれた瓦礫を処理するために水路が埋め立てられたため、史跡は昔の水路沿いに多く分布している。《江東区》戦災復興によって水路が埋め立てられたため史跡が多いと考えられる。また、分散していると思われた観光資源も、かつては水路によってつながっていたことがわかった。

4．まとめ

以上、下町の観光マップから観光資源を抽出し、地形図、江戸切絵図、市街地の変容といった視点から検討していくことで、下町の観光資源の分布動向を見出した。観光資源の集積度合いから 3 つの地域に分けた。観光資源の集中している地域には、微高地の上であること(浅草、墨田)、橋のそばであること(吾妻橋、両国、中央区)、明治期に開発された商業地であること(銀座、日本橋)の 3 つの特性があげられた。観光資源の分散している地域は、平坦な低地であること(台東区西浅草)、もともと水田として利用されていた場所であること(墨田区東部)、の 2 つの特性があげられた。観光資源の空白地域は元武家地であること（本所、新御徒町、新川等)、元野原であること(吉原周辺)、防災空地であること(墨田区、江東区の再開発によって計画された防災空地、もしくは大型施設で構成されている場所)の 3 つがあげられた。

今後、観光資源の集中している地域では、そのエリアで完結するのではなく、周辺の観光資源とのつながりを意識し、既存の資源を生かすか、新しい資源をゾーニングしていくべきであると考える。求心性がないため、魅力に乏しく分散傾向にある場所では、それらの観光資源をつなげる導線を確保することや、それぞれの中間地点に新しい観光要素を作ることが必要であると考えられる。空白地域にも観光の担い手となってもらうことが都市観光の幅を広げることになると考えられる。観光資源の多くは切絵図から推察することが出来た。観光資源はその土地の地形や歴史に根差しており、災害によってもその分布を変えることはしない。変化は都市計画によってもたらされることが多く、首都高の開通や空地の設置によって観光資源の変化を推察することが出来た。

参考文献

1)　槇文彦：見えがくれする都市
2)　越沢明：東京の都市計画史
3)　安藤雄一郎：観光都市江戸の誕生
4)　東京都：東京の都市計画百年